様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１１日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７４０１０１２
研究課題名（和文）　言語・文化調査に基づくパラウン史の解明

研究課題名（英文）　Linguistic and cultural approach to the history of Palaung

研究代表者
新谷　忠彦（SHINTANI TADAHIKO）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：９０１１４８００

研究成果の概要: 国境を越えた「タイ文化圏」に広く分布するパラウン族は文字を持っていない。こうした無文字民族の歴史を支配民族が書き残した文献資料からではなく、直接現地で収集した言語及び文化データに基づいて解明するため、パラウン及び周辺民族の現地調査を幅広く行った。その結果、パラウン各方言の言語音変化や借用語、文化的な特徴などから、同じ系統のパラウン、ワ、プランがサルウィン系及びメコン系諸民族との関係によって「民族」として分化してきたことが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	3,200,000	0	3,200,000
２００６年度	2,600,000	0	2,600,000
２００７年度	2,600,000	780,000	3,380,000
２００８年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総　計	11,100,000	1,590,000	12,690,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：パラウン族、タイ文化圏、ワ族、プラン族、盆地連合国家、サルウィン河、メコン河

１．研究開始当初の背景
タイ、緬甸、ラオス、中国雲南省が国境を接する一帯では、13 世紀～20 世紀にかけて、タイ系民族を中心とする数多くの盆地連合国家が興亡を繰り返したが、国民国家形成の流れの中でこうした前近代の国家群は消滅してしまい、現在の領域国家に吸収されてしまった。そのため、こうした盆地連合国家群の存在はほとんど忘れ去られてしまい、その実態についての研究もほとんど行われていない。しかし、近代国家の枠組みによって分断されてしまったにもかかわらず、この地域では、タイ系言語のリンガフランカとしての地位は今尚失われておらず、国境を越えた人、物、カネの移動・交流は綿々と続けられており、何らかの緩やかなつながりを持った一つの複合民族文化交流圏としての実体は変わっていない。このような地域を一体として捉えた研究が皆無なことから、当初はシャン文化圏と呼び、後にタイ文化圏と改名したこの

地域を一体として捉えた内部からの研究を1996年度の文部省科学研究費補助金（研究課題番号08041009）によってスタートした。こうした視点からの研究を進める中で、（１）当該地域に居住する各種民族に関する直接的かつ客観的な資料が極めて乏しいこと。（２）文字を持たない民族の歴史を、文字を持った支配民族が書き残した資料からではなく、当該民族の言語データや文化データを使って解明できる可能性があること。の二点の結論を得た。そこで、この地域に居住する民族の言語・文化データを現地において直接収集することによって、この地域の歴史研究はもとより、言語研究や文化人類学的研究にも資する新たな科学的かつ豊富なデータベースを構築するとともに、こうして収集された言語・文化データが実際に当該地域の歴史研究に有効であることを実証し、新たな方法論として確立したいとの考えが本研究の背景にあった。

２．研究の目的

本研究は文字を持たない民族の歴史を解明するために、支配民族が残した文献資料を使う従来の方法ではなく、現地で直接収集した言語・文化データを使ったまったく新しい方法を使った新たな研究の方向性を開こうと意図したものである。その最初のテストケースとして、タイ文化圏に広く分布している北方モンクメール系のパラウン族を取り上げ、周辺民族をも含めた幅広い言語・文化データを収集し、言語学的分析を行うことはもとより、その言語や文化の中に、異民族との接触や自然環境との接触の歴史を探ろうと考えたものである。又、この地域の言語・文化に関する科学的な資料が、政治的・地理的な事情から、極めて乏しい現状に鑑み、積極的なフィールドワークによって新たなデータベースを構築するとともに、タイ文化圏におけるリンガフランカであるにもかかわらず、国語にはなりえなかったタイ系言語で書かれた文献資料の収集・整理・解読をも目指したものでもある。

３．研究の方法

タイ文化圏に幅広く分布するパラウン語は非常に方言差が大きい。こうした方言差はこの民族の移動や異民族との接触の歴史を反映していると考えられる。そのため、各地のパラウン語方言はもとより、近隣諸言語の語彙データを収集し、音韻体系を記述するとともに、借用語や音韻変化を精査する。一方、文化調査では生産技術や農耕技術、栽培植物などを中心に調査し、言語調査の結果と対比しながら、当該民族の移動や異民族との接触の歴史を明らかにする。又、これまでほとんど省みられることのなかった、タイ王国の言語とは異なる、タイ文化圏のタイ系言語で書かれた文献の収集・整理・解読作業を着実に続ける。

４．研究成果

（１）本研究課題で焦点を当てたパラウン族については、北は中国雲南省保山地区から南はタイ王国のチェンマイまで、西はカローから東はチェントゥンまで、12地点での言語・文化調査を行った。その結果、この言語は従来、北部では古来の有声音が無声音化せず、有声音をそのまま保持しているのに対して、南部では皆無声音化しているとされていたが、北部においても一部で無声音化している方言があることが分かった。又、南部方言の一部には音節末に閉鎖を伴った鼻音(-pm, -tn など)が現れている方言が見付かった。パラウンは大部分がサルウィン河の西に住み、東側には比較的少ないが、このような特徴を持つ南部方言話者は皆サルウィン河の東に住んでおり、このことは南部のこの民族の移動及び異民族との接触によるものと考えられる。北部で無声音化が起こっている方言話者もサルウィン河の東に住んでおり、パラウン語話者にとってサルウィン河はかなり重要な方言境界になっているようである。

（２）南部方言の中でもカローのパラウン語はかなり特異である。彼らはかつて「パレー」と呼ばれていたことがあるが、現在ではそのような名称は誰も知らず、自分たちはパラウンだと主張している。音韻体系そのものから見れば、カローのパラウン語は間違いなく南部方言の部類に入るが、ビルマ語からの借用語が多い点で他の南部方言とは事情が異なる。又、南部方言話者はほとんどがビルマ語を話せないが、カローのパラウン語話者はタイ系言語よりもビルマ語を話せる人が多く、この点でも特異である。こうした諸点から、カローのパラウンは他の南部方言話者とは移動経路が異なるか、あるいは、比較的新しく移動させられた可能性がある。

（３）ヤッサウのパラウン語では、他の方言で長母音として現れる開音節において、-h が音節末に現れることがあり、このことは一部の方言で声調が現れている現象を説明するのに大いに役に立つであろう。実際に、同じ北方モンクメール系の言語の中で、ウー語のように、母音の長/短の対立を声調の対立に変化させている言語の例がある。

（４）パラウン語と親縁関係を持つ北方モンクメール系の言語としてワ語、プラン語があるが、この三種類の言語の話者の分布は、おおむね西から東へパラウン、ワ、プランの順となっており、又、北から南へもパラウン、

ワ、プランの順となっている。この三種類の言語の内容とこうした地理的な分布状況を勘案すると、パラウンはサルウィン系のタイ系民族社会に組み込まれた民族であり、プランはメコン系タイ族社会に組み込まれた民族であって、どちらのタイ系民族社会にも組み込まれなかったのがワ族であると考えられる。このように同じ北方モンクメール系の中で、異なるタイ系民族との関係によって「民族」として分化してきた経緯が明らかになった。

（５）北方モンクメール系民族の小さなグループとしてカノ、リアンという民族がそれぞれアウンバン周辺、ロイレム周辺などに見られるが、彼らの言語にはカレン語の影響によるものと考えられる痕跡がかなり見られ、カレン系民族の移動の歴史を探る上で重要な証拠になる可能性がある。又、リアンはシャンやビルマからはカレン族の一部とみなされている。

（６）これまでの現地調査によって得られた言語データは膨大なもので、新たに発見された言語や、名前だけは知られていても科学的なデータのなかった言語についての大量のデータが得られ、この地域の言語データの収集に関しては世界で最も優れた地位を獲得している。

（７）これまでその存在は知られてはいたが、難解な文字法故に外国語に翻訳されてこなかったシャン語で書かれたクロニクルが、我々の手によって世界で初めて外国語に翻訳された。又、徳宏タイ語で書かれた文献についても我々の手で収集・整理・解読作業が進んでいる。

（８）これまでの調査から、同じタイ文化圏の中でも大河流域によってやや状況の異なる文化圏の存在が明らかになってきた。サルウィン系タイ族とメコン系タイ族は、言語上の差異は少なく、相互のコミュニケーションに支障はないものの、お互いに疎遠に感じる傾向がある。このことから、大陸部東南アジアについて、大河流域文化圏という視点からの研究も今後の重要な課題である。大陸部東南アジアには、東の方から紅河、メコン河、サルウィン河、イラワジ河とあるが、それぞれの流域文化圏で繰り広げられた民族興亡の歴史を、言語・文化調査に基づくデータから解明することによって、この地域の歴史構図が一変する可能性を秘めている。中でもサルウィン河及びイラワジ河流域に居住する民族に関しては、極端に資料が乏しく、未知の言語（民族）が大量に発見できる可能性がある。政治的・地理的状況から、この両大河流域で直接調査することは容易なことではないが、近年この流域に居住する人たちが、伝統的な移動範囲を超えてかなり遠くまで移動する状況が生まれてきており、調査方法を工夫することによって数多くの未知の言語（民族）を発見できる可能性があり、これからの研究の重要な課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８件）

①DANIELS CHRISTIAN
論文標題：Script as the Narrator ： Oral Tradition and Literacy in Tay Maaw Chronicles
掲載誌名：Senri Ethnological Studies
巻：74 巻
最初と最後のページ：151-170
発行年：2009 年
査読の有無：有

②ダニエルス　クリスチャン
論文標題：資源としての伝統技術知識
掲載誌名：『資源と人間』資源人類学
巻：01 号
最初と最後の頁：75-108
発行年：2008 年
査読の有無：無

③新谷　忠彦
論文標題：山地民のことば
掲載誌名：自然と文化そしてことば
巻：03 号
最初と最後の頁：22-28
発行年：2007 年
査読の有無：無

④ダニエルス　クリスチャン
論文標題：総論：山地民の歩んできた道
掲載誌名：自然と文化そしてことば
巻：03 号
最初と最後の頁：6-17
発行年：2007 年
査読の有無：無

⑤新谷　忠彦
論文標題：センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像（II）
掲載誌名：アジア・アフリカ言語研究
巻：73 号
最初と最後の頁：177-190
発行年：2007 年
査読の有無：有

⑥ダニエルス　クリスチャン
論文標題：序論―知識資源の陰と陽
掲載誌名：『知識資源の陰と陽』資源人類学
巻：03 号
最初と最後の頁：13-25
発行年：2007 年
査読の有無：無

⑦DANIELS CHRISTIAN
論文標題：Historical memories of a Chinese

adventure in a Tay chronicle; Usurpation of the throne of a Tay polity in Yunnan, 1573-1584
掲載誌名：International Journal of Asian Studies
巻：3 巻 1 号
最初と最後の頁：21-48
発行年：2006 年
査読の有無：有
⑧ダニエルス　クリスチャン
論文標題：史料と虚構のあいだ―あるタイ族国王の系譜
掲載誌名：歴史科学
巻：183 号
最初と最後の頁：1-12
発行年：2005 年
査読の有無：有

〔学会発表〕（計　3 件）
①唐立（ダニエルス　クリスチャン）
発表標題：18, 19 世紀雲南民間天然資源管理初探
学会等名：明清以来雲南高原的環境與社会国際学術討論会
発表年月日：2008 年 8 月 29 日
発表場所：復旦大学歴史地理研究中心
②DANIELS CHRISTIAN
発表標題：General Comment
学会等名：International Symposium on Written Culture in Mainland Southeast Asia
発表年月日：2006 年 2 月 4 日
発表場所：国立民族学博物館
③DANIELS CHRISTIAN
発表標題：The Body-tool Relationship in South-western China and Continental South-east Asia
学会等名：XXII International Congress of History of Science, SC8. Chinese and Western Everyday Technologies in Transition: Approaches to a Cultural Interpretation of Artefacts (Organised by International Union of History and Philosophy of Science: Division of History of Science)
発表年月日：2005 年 7 月 24 日
発表場所：Meeting Room 1, Friendship Palace, Beijing

〔図書〕（計　9 件）
①DANIELS CHRISTIAN
出版社名：弘文堂
書名：論集　モンスーンアジアの生態史―地域と地球をつなぐ―第 2 巻　地域の生態史
発行年：2009 年
最初と最後の頁：1-14
②SHINTANI TADAHIKO
出版社名：アジア・アフリカ言語文化研究所
書名：The Mun Language of Funing County – Its classified lexicon –
発行年：2008 年
総ページ数：xiii+443
③SHINTANI TADAHIKO
出版社名：アジア・アフリカ言語文化研究所
書名：The Palaung Language – Comparative lexicon of its southern dialects –
発行年：2008 年
総ページ数： xi+337
④新谷　忠彦
出版社名：雄山閣
書名：タイ族が語る歴史―「センウィー王統紀」「ウンポン・スィーポ王統紀」
発行年：2008 年
総ページ数：278
⑤ダニエルス　クリスチャン
出版社名：ドメス出版
書名：乾杯の文化史
発行年：2007 年
最初と最後の頁：181-211
⑥SHINTANI TADAHIKO
出版社名：Chulanlongkorn University
書名：Lahu terminology concerning chicken and some other domestic animals
発行年：2007 年
最初と最後の頁：105-107
⑦ダニエルス　クリスチャン
出版社名：総合地球環境学研究所
書名：雲南南部の生態環境史の構築に向けて
発行年：2006 年
最初と最後の頁：497-501
⑧SHINTANI TADAHIKO
出版社名：筑波大学
書名：Akha concept of some domestic animals shown by its terminology
発行年：2006 年
最初と最後の頁：63-65
⑨SHINTANI TADAHIKO
出版社名：アジア・アフリカ言語文化研究所
書名：Austroasiatic tone languages of the Tai Cultural Area ― from a typological study to a general theory of their tonal development ―
発行年：2005 年
最初と最後の頁：271-292

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
氏名：新谷　忠彦(SHINTANI TADAHIKO)
所属研究機関・部局名・職名：東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：９０１１４８００

(2)研究分担者
氏名：ダニエルス　クリスチャン(DANIELS CHRISTIAN)
所属研究機関・部局名・職名：東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：３０２３４５５３

(3)連携研究者